

近代日本文学における仏教の問題

——仏教的文学論の試みのために——

見 理 文 周

はじめに

もつとも純粋な立場からすれば、 \wedge 文学と仏教 \vee のかかわり合いについて論ずること、それ自体に、問題があるのかもしれない。芸術的動機（創造の世界）と宗教的動機（行の世界）とは本来、志向を異にする矛盾的存在であり、根本的に次元の異質なものとされているからである。

芸術家と宗教家とも究極的には、互いに否定しあう存在だと言われている。よく例に引かれる道元禅師の、「文筆詩歌等その詮なきなり。捨つべき道理左右に及ばず」⁽¹⁾である。

ところが古来、すぐれた芸術は必ず宗教に深い影を落とし、すぐれた宗教は必ず芸術的な形式や方法を伴っている。虚構と信心との両者は、つねに、この矛盾的自己同一とでもいふべき微妙なあわいに共存し、契合して、成立している⁽²⁾のである。これを文学に即して言えば、前述の道元禅師なども「無情説法無情得聞」⁽³⁾を説いて、有情非情を超えたところに、凡夫の声即仏性の声として、文芸の成立を認めておられるように考

えられるのである。

しかも、まさしく近代の小説は、その凡夫の声なのである。だから、自分もまた一人の凡夫であるが故に、近代文学や現代文学への愛着を断ちがたく、同時に一方、仏教への係わりをもつ者として、仏教への関心も捨てがたく思っている。たとえば、

○仏教思想は、どのように文学の理論や作品に反映し、表現されているのか。

○仏像や経典・仏教用語等は、どのように作品に摂取され、表現されているのか。

○仏教的人間像は、どのように理解され、表現されているのか。
などについて、無関心ではおれないのである。そこで、たとえ牽強附会の謗をまぬがれぬとしても、日頃摸索を試みながら気のついたいくつかの問題について、述べてみたいと思うのである。

註 (1) 『正法眼蔵随聞記』二の八

(2) 「非連続の連続」などとも言われる。

(3) 『正法眼蔵』所収「無情説法」

かつて、日本人の精神史の中に色濃く流れていた仏教的思考は、当然のこととして、日本文学の中にも反映し、さまざまの影響を与え、構想や文体や語彙などにも、仏教的な特色を生み出している。そうした例証として二三、従来の研究や所説を振り返ってみると、まず和辻哲郎博士は、「日本の文芸は外来的なものとしての仏教の影響を受けているのではなく、己れ自身の生活としての仏教的体験から産れ出た」ものとして、「芸術的法悦・六道輪廻・世間無常・空の實踐」等の、文学への投影を述べている。⁽¹⁾

また阪口玄章氏は、文学作品を「匂いづけ」「特色づけ」た仏教の内容として、「一、因縁・因果 二、無常・発心 三、遍照・救済 四、精進・求道 五、無我・滅死」を挙げている⁽²⁾し、富倉徳次郎氏は、「日本の美の理念の展開は、また仏教の日本人の生活への浸潤の歴史であるともいえる」として、「ものあわれ・幽玄・さび」の三つの美の理念を挙げている。⁽³⁾

さらに福井久蔵博士や豊田八十代氏等が、この種の研究が少いことを嘆いて啓蒙的な論述をされたことは有名で、そうした流れに立ち小林智昭氏は、日本文学の全体を覆う基調は「無常感」であるとしている。⁽⁴⁾なお、斎藤清衛博士が、日本文学の素材として「恋愛・信仰・旅愁」の三つの精神をあげ、永井義憲博士も日本文学に大きな影響を与えた仏教の、三つの考え方として、「第一は、世間無常の考え方、第二には因果

応報の考え方、第三としては輪廻の考え方」としているなど、枚挙にいとまがない。⁽⁷⁾

これを要するに、仏教思想が日本の文学の中に投影したものは、大きくは「無常」 \vee と「因果」 \vee や「輪廻」 \vee の面であったように思われる。わけでも「無常」 \vee の思想は、日本人の精神史を支える一つの大きな柱とされており、日本の文学と芸術の歴史は、多かれ少なかれ、これとの深いかわり合いによって成立していると言えるのである。この「無常」 \vee が、「無常観」 \vee という冷徹な認識としてではなく、不断に流れ移りゆくものへの詠歎として、つまり「無常感」 \vee として、日本人の心の中に浸みわたって行ったことは、多くの人の知るところである。それが文学を美化し、文学はその「無常感」 \vee を伝えんがために美文化して行った。かくて「無常は、日本の文学思想史を貫く、Key-word」⁽⁸⁾となったのである。

ところで問題は、例証したこれらの研究内容を検討してみると、その素材や対象の殆どが、近代以前の文学作品に限られているということである。当然のこととはいいながら、中世のものが圧倒的に多く、近代のものには殆ど触れられていない。つまり文学研究の範囲からすれば、それらはすべて、古典文学の領域において言われていることなのである。

それならば一体、仏教的思考は、近代以後の日本人の生活には、もう生きていないのであろうか。そして「無常感」 \vee は、近代文学の中から姿を消してしまったのだろうか。この点について益田勝実氏は、その「日本人と無常」⁽⁹⁾において、「日本人と無常との格闘は、近代に入って完全に休止状態にあり、……人びとの生活に浸透していた無常感、仏教の

全面的後退によって、払拭されたといってもよい。近代日本人の現世主義・物質主義は、仏教とともに無常思想を生活から遠ざけた」と述べている。

益田氏は、その理由として「無常思想の皮相的摂取、無常感的摂取のため」をつけ加えているが、これは日本人の「無常」の摂取が、無常を感じることから無常を観ずることへではなくて、逆に無常観（仏教思想）から無常感（美意識）へという、消極的で受身な見方のためだとしていることは、注目に値する。なお、この点についての唐木順三氏の説、「詠嘆的無常観から自覚的無常観へ」は表現を異にするが、本筋から外れるので触れないことにする。

要するに、日本文学とその研究の流れの中に、近代に入って一つの断層が出来たことは明らかなことである。しかも、この断層が、まだ埋められていないのが現状のように思われる。研究が絶無ではないにしても極めて少く、学問として体系化された考察の成果は、まだ行われてはいないように思われるのである。しかし、これでいいのだろうか。仏教文学といえば、いつも「法語」や「唱導文芸」だけといった現状で、はたしていいのであろうか。

- 註
- (1) 『続日本精神史研究』所収「日本の文芸と仏教思想」
 - (2) 『日本文学と仏教』所収「文学にあらわれた仏教的民族精神」
 - (3) 『現代仏教講座』第四巻所収「日本文学の理念と仏教」
 - (4) 福井久蔵『国文学と仏教』、豊田八十代『国文学に現れたる仏教思想の研究』
 - (5) 小智林昭『無常感の文学』
 - (6) 斎藤清衛『日本文学研究法』
 - (7) 『浅草寺仏教文化講座』第十集所収「仏教と文学」

- (8) 『国文学』第十六卷六号 千葉直一「川端康成の文学的認識の背景」
- (9) 『国文学』第十六卷六号
- (10) 唐木順三『無常』中、兼好と道元についての叙述

二一

そこで、ひとまず、現在までに行われている「文学と仏教」をテーマとする研究の跡を振り返ってみると、その経過は、永井義憲博士の著『日本文学』に詳述されている。この著述は付篇として、「仏教文学関係文献」（叢書目録と雑誌論文目録）も載せているが、関係叢書に近代以後のものは一点も無く、関係論文も近代のものは約千篇のうち、わずか十六篇にすぎない。そして日本における仏教文学の研究対象は、筑土鈴寛氏が「仏教文学研究」に示した二十六項目を基準とし、それが学会の通念になっていることが知られるのである。因みに今、その十五項目を写せば、「1、聖典及び翻訳文学 2、碑文銘記類 3、仏教歌謡 4、法儀文学 5、僧伝文学 6、仏伝・聖衆讃仰の文学 7、仏教説話文学 8、教義宣揚・勸化教誡の文学 9、教団の歴史文学 10、仏教詩歌 11、仏教芸能詞章 12、仏教伝説及び笑話 13、仏教小説種史類 14、仏教随筆 15、仏教紀行類」であり、一見して、ここには古色蒼然として近代文学とは異質なものだけが羅列されている。

そうすると、そもそも「仏教文学」とは一体何なのか、という根本的な疑問を、改めて検討し直さなければならなくなるのである。「仏教文学」の学的定義、および研究範囲はどうなっているのだろうか——？

まず永井博士によれば、「仏陀の教説に関する一切の文献、すなわち

法・律・論の三蔵のすべて」と、「さらにインド・中国・チベット・日本その他の諸語による仏教に関する著作をふくめる」⁽²⁾のが、仏教世界の通念であるという。これは小野玄妙博士の「一切経全体を文学と見」⁽³⁾とか、泉芳環氏の「仏陀の教説に關係する一切の経典論書」⁽⁴⁾などによるものようであるが、しかし、これを山辺習学氏の「仏教の思想または信念を文学的に表現したもの」⁽⁵⁾に比較すると、意味はかなり違ったものになるように思われる。

また「仏教文学研究会」(昭和三十七年結成)は、「仏教的文学・芸能、および一般文学芸能の中に現れた仏教の研究」という目的をかかげているが、「仏教的文学」の内容が明確でない。

次に、それでは国文学界では、 \wedge 仏教文学 \vee をどのように解釈しているのだろうか。

新潮社の『日本文学大辞典』では、「仏教なる宗教現象、又は宗教意識を対象として、文学的に具体化したもの」として、三種の分類を示すが要約すれば次のようである。

- (1) 宗教的価値を目的として製作され、文学的価値が付随しているもの。
- (2) 宗教的現象を素材として、文学的要求から創作されたもの。
- (3) 宗教的価値と文学的価値とが、同一の強さで主張・要求されているもの。

しかし残念ながら、この説明と分類では、 \wedge 仏教文学 \vee の何たるかを明確に把握することは困難ではないだろうか。

この点、蒼明社の『日本文学辞典』の説明は、かなりはっきりと対象を浮かび上がらせているように思われる。即ち、 \wedge 仏教文学 \vee は「仏教教理の理解と普及を目的として、これを文学的に表現するもの」と、「文学的要求即ち芸術的契機から素材を仏教的現象に求めるもの」との、二つに分けられるというものである。これは、筆者の抱懐する意見にかなり近い解釈のように思われるが、そのことについては、また後で述べたい。なお、百科辞典などで、仏教美術や仏教建築の項はあっても、 \wedge 仏教文学 \vee の項目の無いのが多い。

さて、以上を見てきて、判明したことは、要するに現状では、 \wedge 仏教文学 \vee の研究は古典文学の領域に限られているばかりでなく、 \wedge 仏教文学 \vee の語義すらも、ただ通念として存在するだけで、厳格な学的定義としては確立していないということである。近年、唐木順三氏らの働きかけで、文学全集にもようやく仏教文学が採録されるようになってはいるが、 \wedge 仏教文学 \vee そのものの定義は不問にされているので、その位置づけは、まだ曖昧さを残しているのである。

註

- (1) 『岩波講座、日本文学』
- (2) 永井義憲『日本仏教文学』第十一章、2
- (3) 小野玄妙『仏教文学概論』
- (4) 泉芳環『仏教文学の鑑賞』
- (5) 『仏教大学講座』所収「仏教文学」
- (6) 『古典日本文学全集』(筑摩書房)、『古典文学大系』(岩波書店)等

三

次に、 \wedge 近代文学における仏教 \vee のテーマで発表されたものについて

て、眺めてみたい。

しかし、これは前述のように、その数は極めて少くて、むしろ「現代文学における仏教」をテーマにした研究の方を、最近、時おり散見する。例えば『国文学』の特集に「近代日本の美意識」⁽¹⁾、「無常の美学」⁽²⁾というのがあり、この中で梅原猛氏は、「死の美学なるものは、本質的に近代日本文学において、大してかわっていないように思われる」とし、二つの現れを示している。⁽³⁾つまり、一つは破滅型の文学者として、芥川竜之介、大宰治、坂口安吾、高橋和己を挙げ、もう一つは、美的抒情型の文学者として、川端康成と三島由紀夫を挙げている。また現代文学における「無常」の系譜として、吉村貞司氏が芥川竜之介を、千葉宣一氏が川端康成を、佐藤泰正氏が小林秀雄と唐木順三を、磯貝英夫氏が深沢七郎を、川嶋至氏が高橋和己を、そして笠原伸夫氏が吉行淳之介を、それぞれ論じているのは興味深い。この他に当然、真継伸彦や野間宏・武田泰淳・水上勉・丹羽文雄なども、研究対象として取上げられるべきであるが、本筋をそれるので今は触れない。

さて「近代文学における仏教」に戻って、このテーマに対し、仮に(1)否定的なものと、(2)、肯定的なものに分けて眺めてみる。(1)についてはまず高橋新吉氏を挙げるが、高橋氏は「禅と文学」と「近代日本文学と禅」の二つの文章で、十一人の作家について考察を試みている。が、その文体も文意もシニカルなもので、それだけに客観性を保持し、的を射ているのかもしれない。氏によれば、「明治以後凋落の一端を辿って、今日では、仏教を信ずる日本人は、晴天の星を数えるように、寥々たる

ありさまである……傑れた仏教文学などは皆無である。……近代文学の海をいくら遊泳しても、禅の片鱗にも打つかりはしない」という。

高橋氏はこうした仏教文学不振の理由として、廃仏毀釈による仏教の断絶と、不立文字、一字不説の禅の性格を挙げているが、それでも「水中に遊魚ありとすれば、その影位は見られるかもしれない」として、次のような作家や作品の考察を行っているのである。

仮名垣魯文、坪内逍遙、二葉亭四迷、谷崎潤一郎、有島武郎、葛西善蔵、坂口安吾、森鷗外（寒山拾得）、夏目漱石（門）、幸田露伴（五重塔）、島崎藤村（東方の門）

しかし高橋氏は、そのいずれの場合も、作家がどれほど禅に味到していたかは疑問であるという姿勢を貫き、その結論として、「以上のように、近代日本文学を祖上にして錆びた包丁で切り裂いたが、禅の、中味は、まだ文学化されていないことが判然としたのである」と結んでいる。

（傍点筆者）

(1)について、もう一人、外村繁氏を挙げてみるが、氏は亀井勝一郎氏によれば「今日正当な意味での浄土真宗作家」⁽¹¹⁾（共に故人だが）である。外村氏は、その「近代日本文学と浄土思想」⁽¹²⁾の中で、「仏教の信仰の固定化、形式化」が、文学者たちの仏教に対する無関心を生んだとして、「近代日本文学には、……『出家とその弟子』他二三の作品を除いては、仏教思想の影響を受けたと思われる作品は殆どない。更に不思議なことに、恰も日本人の生活の中には仏教は存在しないかのように、その作品の中に仏教の形式さえ描かれているのは殆ど稀れである。極端に言

うならば、現代の文学作品の中に、葬いの場面を除いては、僧侶の姿を見出すことは出来ない」と述べている。

しかし外村氏は、文学の可能性を悉く否定しているわけではない。

『歎異抄』や佐藤春夫の「文学する心」などによって、文学の本質的な在るべき姿を探りながら、今日、人間の生活に何ら条件も抵抗もなく生きていく「円満具足した幸福な常識人」⁽¹³⁾にとって、それは無用なものであることを確認している。そして結局のところ文学は、信仰者が「救い」を信じてしかもその「救い」の空しさを信じることで、信仰の固定化や形式化から離脱できるように、自分の殻を絶えず打ち砕き続けること——つまり不断の内面的革命への参加を意識すること——で維持され、そうしてこそ近代文学が、浄土信仰と同胎のものとなり得ることを説いているのである。

(1)の以上のような考察に対して、(2)の立場から取上げる野間宏氏の所説は、その発想のユニークな点で注目すべきものに思われる。

周知のように野間氏は、幼少年時に在家念仏の宗教生活を体験し、成長して仏教を離れ、『正法眼蔵』をいかにくりかえし読もうと、この人間の歴史の問題を解く方法をとりますという「できない」⁽¹⁴⁾として、唯物弁証法と史的唯物論に向った作家である。

このような野間氏が、近代日本文学において坪内逍遙の『小説神髓』が果たした役割を、否定的な疑念として提出しているのである。即ち氏はその「日本近代文学と仏教」⁽¹⁵⁾において、『小説真髓』は「新しい時代の文学の名のもとに日本文学を一つの領域にとじこめてしまった」とし、こ

の作品の出現によってもたらされた近代日本文学の出発の陰に、「日本の文学が失ったもの」も見なければならぬと言う。

このようにして野間氏は、幸田露伴の『風流仏』が「法華経」の方便品に形式を借りていることを指摘し、それが西行や芭蕉などによって結晶された「日本の庶民の風流と仏道とを統一する美的思想」⁽¹⁶⁾だとしている。また、一見して古めかしい泉鏡花の『高野聖』をもちだして、『小説真髓』の小説理論とその方法によってはとらえることの出来ない世界が現代日本にあることを明にただけではなく、その世界をとらえて作品のなかにとじこめることに成功した作品である」と述べている。

「その世界」とは、思想として仏教の中に生き、現代にも生きていく世界であり、『小説真髓』が推し進めようとした写実主義ではどうしても映し出せなかったもの——近代人がともすれば荒唐無稽としてしまいがちな妖怪変化——を、現代社会にも存在するものとして、野間氏は鏡花の意図に汲み取ろうとしているのである。

(2)について、最後にもう一人、哲学者の梅原猛氏を挙げたいが、それは氏が「地獄と対決する近代の文学者」として、宮沢賢治と大宰治を論じているからである。氏は賢治の思想を「(1) 生命の思想、(2) 修羅の思想、(3) 菩薩の思想」の三つの思想とし、それをすべて天台の思想を伝えたものだとしている。また大宰治の人生を「道化地獄」として、ユニークな仏教的文学論を展開している。つまり、この二人とも従来の「無常感」⁽¹⁶⁾的な発想とは別な立場に立って、近代文学を眺めようとしているのであり、ここに「近代文学における仏教」の可能性を指摘することが出

来よう。

- 註
- (1) 『国文学』第十五卷第八号
 - (2) 同 第十六卷第六号
 - (3) 同 第十五卷第八号所収「日本人の美意識」
 - (4) 同 第十六卷第六号所収「愛と無常」
 - (5) 同 同 「川端康成の文学的認識の背景」
 - (6) 同 同 「無常という事」「無常」
 - (7) 同 同 「深沢七郎における無常」
 - (8) 同 同 「高橋和己における無常」
 - (9) 同 同 「生と無常」
 - (10) 高橋新吉「禅と文学」
 - (11) 『現代仏教講座』第四卷所収「宗教と芸術」
 - (12) 同 同所収
 - (13) 佐藤春夫「文学する心」
 - (14) 『現代仏教講座』第四卷所収「仏教のなかの私」
 - (15) 『講座近代仏教』第四卷
 - (16) 梅原猛『地獄の思想』第十章、第十一章

四

以上を見てきて思うことは、通念としての「仏教文学」の概念を明確に位置づけねばならぬ、ということである。そのためには、「仏教文学」の他に、「仏教的文学」という呼称を設けることが望ましいと思ふ。

ここで遠藤周作氏の所説⁽¹⁾を借用して論を進めれば、「仏教文学」は従来のように考えられてきたもので「仏教における文学」のこと。つまり、文学が仏教の擁護や伝導・布教のために従属している文学作品である。(キリスト教の「護教文学」)

それに対して「仏教的文学」というのは、いわば「文学における仏

教」であって、これは仏教的立場を擁護するためのものでもなければ、

文学の立場を固執しようとしたものでもない。むしろ対立し矛盾する文学と仏教との葛藤・相剋から生まれた作品であって、両者の立場に身を置くことから生ずる様々な内面的苦汁が、生々しく滲み出たようなものでなければならぬ。そして、こうした作品をこそ、「近代日本文学における仏教」的文学作品と呼びたいのである。

こうした観点に立って、従来の作品群を検討すれば、「仏教的文学」のテーマはおおのから整理されてくる筈である。即ち、仏教が単なる好奇心や揶揄の対象として、小道具的に使われた作品と、作者自身が何らかの仏教的問題意識を内包している作品との区別が、はっきりしてくるのである。

なお、先に蒼明社の『日本文学辞典』の「仏教文学」の解釈が私見に近いと述べたことも、外村繁氏の所説を引用して、近代文学の姿勢には浄土信仰と同胎の作用があることを仏教的文学の可能性として指摘したことも、この点に係っている。はたせるかな亀井勝一郎氏も、「明治以来、宗教と文学の双方に相渉った作家は甚だ少い⁽²⁾」としながらも、武者小路実篤は「無限定の愛」——宗教と文学等の矛盾は矛盾のまま「一如」の世界としてその中に生きる——に文学を成立させたことを、倉田百三は「宗教的浄化の世界と自己の肉欲とのあいだの戦い、その矛盾の告白」に文学を成立させたことを、そして岡本かの子は、「煩惱即菩提」の「即」の微妙においてその文学を成立させたことを、述べているのである。「背徳の極致で、逆に大乘の教を実証しようとしている」と

いった表現は、△仏教的文学√の在るべき姿を端的に指摘した言葉であると言えよう。

さらに、ここで注目しなければならないことを一つ、つけ加えたい。

周知のように、近代日本文学の主流をなしたのは自然主義文学であるが、これを(1)、倫理的モチーフの文学とすれば、これに対する(2)、美的モチーフの文学というものが考えられる⁽³⁾。即ち、近代ロシア的アウトサイダーである二葉亭四迷⁽⁴⁾から、自然主義作家たちを中心にして「私小説」につながるの(1)の文学。幕末の戯作文学の伝統を継ぐ仮名垣魯文から、硯友社の作家たちを中心にして「大衆小説」につながるの(2)の文学である。(1)が意識的に前代の文学と断絶して、社会の因習や権威を否定する反抗的姿勢をとったのに対し、(2)は前代の文学を継承して、古風な伝統の世界に美を探ろうとした。その行為は、(1)が求道的な修業道で、(2)は芸術至上主義的な職人芸の世界。そして文学の形式は、(1)が「作家的個我のもっとも直接的な表現⁽⁵⁾」としての「告白」で、(2)は「虚構」ということになる。

つまり、これを一見して感じることは、(1)が、その発想の姿勢において、△仏教的文学√に通じるように見えることである。――が、事實は必ずしもそうではない。

注目しなければならぬのはこのところで、先に野間宏氏の所説⁽⁶⁾を引用したごとく、(2)の幸田露伴や泉鏡花等の作品⁽⁷⁾に多く仏教の精神主義や諦念・神祕主義などが現れているが、さらにその流れを引く大衆文学の中に、純文学にはない仏教的修養書のようなものを生み出している

いう事実である。これは、多分に遊び的性格をもつ(2)の文学の、(1)の文学に対する発想と成立の、なんとも皮肉な矛盾ではないであろうか。

このあたりのシニツクな現象について、高橋碩一氏は、「大衆文学中の仏教⁽⁸⁾」で吉川英治の『宮本武蔵』や中里介山の『大菩薩峠』の考察を試みながら、「大衆文学の大多数の読者は宗教的というに近い安心立命をもとめているのである。大衆文学を批判的に読み得るものは実はリクリエーションとして読み捨てており、批判したくもできない無批判の読者がむしろ狂信的に修養の書として熱読している」と述べているのである。

また奥野健男氏も、紅葉・露伴の文学がその教養や文体が戯作や儒仏にもとずいて今日あまり読まれないが、「その文章を支える内的意識や表現された実質は、四迷、鷗外、漱石、藤村にくらべ文学的に劣っているとも、時代遅れであるともいえません」とし、むしろ西洋的な文学にない多くの可能性を発見できる、と述べている⁽⁹⁾。高橋氏の所論と共に、大いに傾聴して再考すべき点であろうと思われる。

註 (1) 遠藤周作『宗教と文学』所収、「宗教的イデオロギイと文学との関係」

(2) 『現代仏教講座』第四卷所収、「宗教と芸術」

(3) 佐古純一郎『文学をどう読むか』所収「近代日本文学と倫理」

(4) 奥野健男『日本文学史』所収「近代文学への道」

(5) 中村光夫『日本の近代小説』所収「自然主義的特質」

(6) 『日本近代文学と仏教』

(7) 幸田露伴『風流仏』五重塔

泉鏡花『高野聖』照葉狂言

(8) 『講座近代仏教』第四卷所収

(9) 奥野健男『日本文学史』所収「近代文学への道」

おわりに

以上、自説を述べることもよりも他説の紹介に多くを費してしまつたが、きわめて雑駁に書き綴つたものの中から、問題のいくつかをまとめよう。

- 1、 \wedge 日本文学における仏教 \vee の研究対象が近代に至つて断絶し、仏教思想がどのように近代文学に投映されているかが明瞭でない。
- 2、 \wedge 日本仏教文学 \vee の学的定義や研究範囲がまだ確立せず、位置づけが漠然としている。
- 3、研究対象としての \wedge 仏教文学 \vee と \wedge 仏教的文学 \vee とは、区別されるべきであり、近代以後の仏教に係わりをもつ小説類は \wedge 仏教的文学 \vee と呼ぶべきではないか。
- 4、自然主義文学の発想姿勢と \wedge 仏教的文学 \vee の成立条件とは、その方法を同じにしている。とくに私小説的な「告白」と、浄土信仰とは。しかし、その成果は必ずしもそうではない。矛盾現象がある。
- 5、 \wedge 仏教的文学 \vee の可能性の点で、近代日本文学中の美的モチーフの作品、及びその流れを汲む「大衆文学」の作品を、見直す必要がある。
- 6、また従来の、仏教文学のモチーフを \wedge 無常 \vee \wedge 因果 \vee \wedge 輪廻 \vee 等とする研究の姿勢のほかに、新しい別の視点や立場を発見したり、設定したりすることも必要ではなからうか。現代文学の研究においては、ことさらである。

あるいは、これら六つの問題は、言わでもの、事新しいことではないかもしれない。しかし \wedge 近代文学における仏教 \vee について何かを言おうとする時に、どうしても避けて通ることのできない根本的な問題をふくんでおり、どうしても一度、触れてみたかつたことなのである。したがつて筆者の本当の研究は、この後から始まるのであり、その意味では、これはあくまでも一つの地ならし的な覚え書にすぎないと言わなければならぬであろう。だが今は、そうした考察に触れるのは別の機会にゆずることにして、筆者の意図する \wedge 仏教的文学論の試み \vee のために、諸賢の理解ある御指導をお願いしたい。

(四六・八・一)

追記

この原稿を書いてから二カ月後に、「仏教における文学」と「文学における仏教」に区分する説を否定する小林智昭氏の文(『文学・語学』第六一号所収「仏教文学の課題」)を拝見したが、今のところ前の自説を変えるつもりはありません。